

——全てのヤンデレを愛する者達へ捧ぐ——

「ああ、これなら問題ない。採用だ」

簡単な面接を終え、履歴書から顔を上げた男が俺に告げた。

ランチから夜の営業に移り変わるあいまの中華料理屋の店内はひっそりと静まりかえっている。国道から道一本ぶん住宅街に入ったところにあるせいかな、通り過ぎる車の音すらもない。

「小窪くんと言ったな。いつから出られる？ 明日は大丈夫か？」

「はい。平日は学校が終わった夕方以降ならいつでも。休みも基本的に空いています」

「そりゃ助かる。ちょうど人が足りなくて困ってた所ですね……」
立ち上がった男が付いてこいとあとをしゃくくる。そのあとを追いつき、並ぶテーブルの間を抜けてバックヤードへ続く通路のカーテンをくぐる。入った途端、空調の効いたホールとは一変して中華料理に特有の油の匂いが鼻についた。

「次からは表じゃなくて裏口から入れよ」

食材の置かれた棚の間の通路の向こう、開け放されたドアとそのむこうに並ぶ雑多な段ボールなんかが見える。あれが従業員用の出入り口って訳か。

「ついだから、制服のサイズ合わせもやるか。その通路の奥、裏口の手前の所が更衣室だ。中で適当な奴を取ってくるという。それと……」

「店長、ちよつといいですか？ 例の奴なんですけど……」

食材の下ごしらえでもしているのだろうか、白衣姿でまな板

に向かっていたコックが説明の途中で男二話しかけた。

その声に応えた男……店長はコックの方へ行つてしまい、俺は一人その場に取り残される。

「適当な奴を取つてこいって、それだけかよ……」

ここで突つ立っていても仕方がない。俺は通路の奥にあるはずの更衣室に向かい歩き出す。

更衣室のドアは通路の突き当たり、裏口のすぐ手前の壁にあった。見たところ特に鍵は掛かっていないようで、何気なく俺は中に足を踏み入れる。

「先輩、おはようございます……え？」

すぐ横から聞こえた挨拶が、途中で疑問に変わる。思わず振り向いた俺の目の前には、バレッタで髪をまとめようとした姿勢のまま固まっている小柄な女の子がいた。

着替えの途中だったのか、はだけた店の制服の上着の間から薄緑色のブラがのぞいている。髪をまとめようと両手を頭上に挙げた姿勢のまま微動だにしない彼女と数秒のあいだ俺は見つめ合う。

「ごめんー」

先に動いたのは俺の方だった。叫ぶと同時にあとずさつてドアを閉める。あまりに勢よく下がったせいで更衣室の向かい側にある棚に背中をぶつけてしまうが、今はその痛みすら気にならない。

「おい、どっした？」

コックと話し終えた店長がこちらに向かってくる。彼に向かつて起きたことを弁解しようとしたその時、後ろで更衣室のドアが開く音がした。

「で、こいつがいきなり入って来て、着替えをのぞいたと」

「そうなんです！ ほんと最低…… 店長、こんな人を採用するんですか？」

「すみません……」

ただひたすら頭を下げ、さっきの女の子に謝る。そんな俺に向かつて彼女の冷たい視線が容赦なく突き刺さっている。

「バイトの手が足りてないことは、お前だつて判つてるだろ？」

不幸な事故だよ、事故。こいつだつてわざとやった訳じゃないんだし、許してやれよ」

「事故つて……」

鼻白む女の子に向かつて、俺はよりいっそう頭を深く下げた。ここで下手に弁解をすれば、まとまる場もまとまらなくなる。

「はあ…… もういいわ。わかりましたよ店長」

「物わかりが良くて助かるよ」

「こんなことでいつまでも争つても仕方ないですし」

ため息をついてかぶりを振る彼女の声に俺は顔を上げる。その動きで、慌ててまとめたせいかわらぬバレッタでまとまり切れていないほつれ髪が微かに揺れた。

「みんな、おはよ〜」

重苦しい雰囲気、脳天気な大声が破った。飛び跳ねるように更衣室から厨房への通路をやってきた別の女の子が、さっき更衣室で出会った女の子に後ろから飛びつく。

「どしたの？ 元気ないよ〜」

「や、やめてください先輩。あ、きやあっ！」

飛びついた女の子は、「さきようななこ」と手描きの丸文字で書かれたネームプレートを店の制服の胸に付けていた。ご丁寧にネームプレート之余白にはびっしりとハートマークやらよくわからないイラストやらが書き込まれている。

「あ、そういえば更衣室に名札が置きっぱなしだったよ」

「ありがとうございます先輩。急いで着替えたから付け忘れちゃいました」

同時に彼女はまた俺をにらみつける。確かに急いで着替える原因になったのは俺だけど、そこまで目の敵にしなくても思つてしまふ。

そんな俺達の様子にもせず、「さきようななこ」さんが、スカートのポケットからもう一枚のネームプレートを差し出す。プレートには「藤沢未莉亜」の文字。

ふじさわ……何と読むのだろうか。珍しい彼女の名前について目が引きつけられる。

「なに？」

「いや、その名前、なんて読むのかなって」

『『みりあ』 他に読みようがないでしょう』

きつぱりと言いつけられると返す言葉もない。どうやら本気で嫌われてしまったようだ。

「店长、そういえば彼、新しいバイト子なの〜？」

「ああ、ついだから紹介しておくか。こんどから新しくバイトに入る小窪だ。お前達と同じウェイターをやってもらおう」

「小窪優史（こくぼゆうし）です。よろしくお願いします」

「もしかして高校生？」

「はい、そうです」

俺の返事に、「さきようななこ」さんは何だかやたら嬉しそうにする。

「この娘、未莉亜ちゃんはずちの店のバイトの中で一人だけ高校生だったんだよ〜 良かったね未莉亜ちゃん、仲間が出来る」

「……………」

藤沢さんは、その言葉になにも答えないまま去って行ってしまふ。

「小窪くん、なにか未莉亜ちゃんに嫌われるようなことしたの？」

「なんか、全然相手にされてないよ〜？」

「いや、その……………」

流石にさっきの出来事を説明するのは気が引けた。傍らの店長を見れば、事情を知っている彼はにやつきながら俺と藤沢さんを眺めている。

「ふーん。何があったかよく判らないけど、未莉亜ちゃんと仲

良くしてあげてね。あと、私も仲良くしようね〜」

俺の手を両手で握り、握手のつもりなのか振り回す相京さん。

「は、はい。どうも」

なれなれしいそのペースに調子を狂わされながらも、俺はこの店でなんとかやっていけそうな、そんな気がしてきていた。

改めて制服の支給をすませ、更衣室のロッカーのひとつを俺が使うようにしてもらう。細かい事務手続きや何やらをすませて帰る頃には、夕方の営業が始まる時間になっていた。

バックヤードではこの店の制服を着た女の子達が忙しく料理を運んでいた。相京さんや藤沢さんの姿もある。

厨房で飛び回る店長に挨拶し、裏口から外に出れば夕方の風が心地よい。

こうして帰り道をたどりながら思い出すのは、更衣室で出会ったあの娘のことだ。未莉亜。みりあ。一風変わったその名前と、俺を冷たい目で見つめるその瞳が、何だか妙に心に残った。

*

「おはようございますー！」

「おうー！」

裏口から厨房に足を踏み入れた俺の挨拶に、店長の野太い声
が応えた。学校が終わってそのまま出勤してきたせいでまだ客
はほとんど店内に居ない。

きちんとノックをし、返事がないことを確認してから更衣室
のドアを開ける。昨日のような事をもう一度繰り返すのはごめ
んだった。

俺に割り振られたロッカーから店の制服を取り出して袖を通
して身なりを整える。そうしている間にも、ドア越しに店長が
コックに何か指図する声と、下ごしらえのまな板の音がドア越
しに微かに聞こえる。

上着、スラックス、そして靴。更衣室の鏡で自分の格好に問
題がないことを確かめ、厨房へ出ようとドアを勢いよく開けた
ときだった。

「きゃっー」

身体を反らし、危ういところでドアにぶつかるのを避けた女
の子がそこに居た。

俺より頭ひとつ分低いところから、女の子の縁なしの眼鏡越
しの瞳が俺を凝視する。

一分の隙もない制服のブレザー。長くもなく短くもないス
カート丈。栗色の柔らかな髪は、綺麗に二つにわけられて
耳の後ろで結ばれている。

小柄な体格と俺を見つめるつぶらな瞳に、俺は小動物かにな
かをとつさに連想してしまう。

「あの、どいてくれませんか？」

その言葉に慌てて道を空けると、俺と入れ替わりに彼女は更
衣室へ入っていった。

そう言えばここ、男女共用で使ってるわりに鍵も何もないん
だよな。そんな不用心でいいのだろうか。昨日の自分の失敗が
思い浮かんで俺はまた心苦しくなる。

だが、それ以上に気になることがあった。さっきの彼女の着
ていた制服、あれは……

「よし、着替えたな。客が来る前に一通りのことは教えておい
てやる」

俺の疑念を厨房からやってきた店長の声が遮る。

そのまま店長に連れられ、各テーブルの番号、食器や箸、お
しぼりの収納場所といったことを教えられる。レストランのパ
イトなんて簡単なものだとためてかかっていたが、何がどこに
あるかを覚えるだけで一苦労だ。

「注文を受けるのはまだ無理だろ。今日はお前は料理を出すの
と空いた皿の回収、それだけだ」

店長が教えてくれることを必死で暗記するだけで精一杯の俺
は、その言葉に一も二もなくうなずく。これで注文など取らさ
れたらどんな失敗をしようか判ったものではなかった。

「……おはようございます」

ぶつきらばうな挨拶の声に振り向けば、店のウェイトレスの
制服姿の女の子……昨日会った藤沢さんが居た。チャイナドレ

ス風の上着に紅色のタイトスカートが実に映えている。

新しく誰かが来た様子はない。ということは、目の前で手慣れた様子で今日の予約状況をチェックしている藤沢さんは、やはり更衣室ですれ違ったあの娘と同一人物なんだろうか。

そう思って注意深く見てみれば、眼鏡をかけていないのと髪をアップにまとめていることの他は背も何もかも同じだった。

身体のラインが見えやすいチャイナドレス風の上着のおかげで、小柄なわりに意外に大きな胸がさっきのブレザー姿より強調されている。

「……なに？」

視線に気付いた藤沢さんがこちらをうるんな目で見つめ、俺は思わず目をそらす。

「どうした？ 未莉亜が気になるのか？」

「いや、その……」

「小窪くんだっけ？ 仕事、ちゃんとやってね」

むすっとした様子で藤沢さんに注意される。まだ何もしていないのにそこまで言われる筋合いはないはずだが、着替えをのぞいてしまったのをまだ根に持っているのだろうか。

「おっはようございま〜す！」

「あ、先輩おはようございませ〜す」

「だから、その、先輩ってのやめてよー」「ななこ」で良いんだから」

挨拶がてらひとしきり藤沢さんにじゃれついたあと、彼女は

俺の方を向いて目を輝かせた。

「おおっ、小窪くんも居る！ よろしくね」

「どうも、今日からよろしくお願いします」

「あ、小窪くんも名札もらったんだ。あたしとお揃いだね」

「お揃い、ですか？」

俺の疑問に「さきようななこ」さんがひらがなで書かれたネームプレートを裏返す。そこには、俺のものと同じく店のロゴマークと一緒に印刷された「相京奈々子」の文字が読めた。

「本当はこつちが正式なんだけどね。漢字ばかりだし、読めないし。ひらがなの方が可愛いでしょ？」

ネームプレートを胸に留めながら相京さんが微笑む。手書きのひらがなのネームプレートと、大人っぽいその表情のギャップに思わずどきりとしてしまう。

「おい、遊んでるんじゃないぞ。三十分後には今日最初の予約が入ってる。用意しとけ」

「はい」

緊張感のない声で応えた相京さんが銀盆を抱えてホールへ出て行く。藤沢さんは俺の方に目もくれず、黙々とデザート用の杏仁豆腐を作り置きしている。

「小窪、お前は奈々子に付いて予約席の準備だ」

「わかりました！」

店長に指示され、俺は相京さんのあとについて準備を始める。こうして、俺のこの店でのバイトの一日目は始まったのだ。

「疲れた……」

芸のない台詞を漏らして、俺は皿を拭く手を少し休める。

客の入りが少ない店だとは思っていなかったけれど、まさかここまでとは。

「今週から春の新メニューが始まるからね、普段の夕方営業の常連さんにプラスして、新規のお客さんも一気に来たんじゃないかな」

仕事を始める前と全く変わらない調子で相京さんが応じる。

「今日なんてまだ少ない方だよ？ あたしが見た中で一番多かったときはね、うーんと、テーブルと座敷が満席になってウェイティングも全部満席になって、お客に立って待ってもらったことがあったかな」

あの時はだいたい百人くらいは居たよね、と相京さん。軽い口調で話しながらも彼女の手はまるで別の生き物のように素早く動き、洗い終わった皿を拭いていく。

「でも、小窪くんも初めてにしてはなかなかだったよ。あたし、すごく助かった」

「どうも…… 自分では全然動けた気がしないんですけど」

「今日が一日目なら、ぼうつとして突っ立ってる時間が無かっただけで十分だよ。未莉亜ちゃんも、小窪くんは良くやったっと思うでしょ？」

少し離れた所で調味料の補充をしていた藤沢さんに呼びかけるけれど、彼女はこちらをちらりと見ただけで返事しない。

「ごめんね。あの娘、人見知りがひどくて」

「いや、俺も悪いですから」

故意ではなかったとはいえ、最悪の出会い方をしてしまったことは確かだ。これから少しずつ信用を積み重ねて行くしかないのだろう。

「おう、小窪。お疲れさまだ」

「あ、店長……」

「高校生は夜十時までだ。もう帰りな」

もうそんな時間になっていたのか。仕事に追いまくられて全く意識していなかった。

「未莉亜、お前も上がりだ。あとは奈々子達に任せとけ」

「あとは私達がやっておくからね、未莉亜ちゃん、おつかれだよ」

相京さんと他の大学生バイト達から口々にねぎらいの言葉をかけられながら、俺達は二人でまかないの皿を抱えて更衣室へ向かう。藤沢さんが何だか不満そうにしているのが気になったけれど、帰れと言われたからには従うしかない。

二人で更衣室に入り、まかないを口に運ぶ。沈黙に耐えかねて、俺はつい藤沢さんに訊ねた。

「藤沢さんって、——大付属高なの？」

「いきなり何よ。私がどこの学校だっていいでしょ？」

けんか腰の彼女に気圧されつつも俺は続ける。

「いや、付属の制服着てたから。そこに置いてある鞆も藤沢さ

「んのでしょ？」

着替え終わって出ていこうとした俺とぶつかりそうになったときに着ていた制服、あれは俺が普段の学校生活でさんさん見慣れたものだ。更衣室の片隅に置いてある学校指定の鞆もさつきからずっと気になっていた。相京さんいわくこの店のバイトで高校生は俺と藤沢さんの二人だけで、俺は指定の鞆でなく私物を使っている。

そうなれば答えはひとつしかない。

「あなた、もしかして制服マニア？ うわ、やだ……」

「なんでそう言う発想が最初に出てくるかな」

心底から気持ち悪そうに藤沢さんが俺をにらみ、椅子ごと少しずつ身体を遠ざけていく。流石にそこまでされると心が痛くなる。

「俺も付属高なの。二年〇組 小窪優史」

ロッカーの中にしまってある制服から生徒手帳を取り出し、あとずさり続けて更衣室の反対側の壁に当たって困っている藤沢さんに向けて聞く。

「藤沢さんは何組なの？ あのリボンだと二年生だよね」

俺の学校の制服の女子のリボンと男子のネクタイは学年ごとに色が違う。すれ違ったときに見た彼女のリボンの色は、確かに俺と同じ二年生を表す臙脂色だった。

「そんなこと、別にどうでもいいでしょ」

単なる好奇心からの質問に、全身から拒絶感をあらわにする

藤沢さん。

俺に続ける余裕すら与えず、彼女は黙々とまかないの残りを口に運んでいる。話し声や洗い物の水音、ゴミを運んでいく足音などが更衣室のドア越しに響く。

狭苦しい更衣室での二人きりの食事。目のやり場に困った俺は、自分の皿に視線を落とす。

俺が食べ終えて一息つけば、ちょうど藤沢さんも最後の一口を口に運ぶところだった。顔を上げると、実に美味しそうに、そして残念そうに最後の一口を味わい飲み込む彼女の姿がある。バイトで疲れた身にはどんな料理でも美味しく感じるというのとはまた違った、本当に満足そうな表情だ。

「で、私は外で待つてるから、早く着替えて出て行ってくれろ？」
空っぽになった皿の上に箸を置き、俺に向き直ると藤沢さんは冷たく告げた。

「あなたを外で待たせて私が先に着替えたなら、また覗かれちゃうかもしれないし」

「あれは間違いだって言ってるだろ……」

「どうだか。ほら、早くしてよね」

それだけ言い残すと、藤沢さんはさっさと出て行ってしまふ。独りで取り残されると狭く感じていたはずの更衣室が急に広がったような気がした。

しかたなく独りで着替えを始めながら、ドアの外で待つているはずの藤沢さんのことを思う。